

保険・年金 フォーカス

欧米生保市場定点観測(9)

カナダの生命保険市場 part1

—米国生保市場と比較して事業構造を見ると—

保険研究部 主任研究員 松岡 博司
(03)3512-1782 matsuoka@nli-research.co.jp

カナダの生命保険市場は、生命保険料収入額で世界第10位（世界シェア2.01%）の生保市場である（2013年¹）。カナダの生保会社は陸続きの隣国米国の影響を強く受けているが、同時に英国連邦²のメンバー国であることもあってか、保険数理等の運営スタイルでは英国生保事業の影響を受けている。

今回は、カナダの生保会社の事業構造を、米国と比較する形でまとめる。

なおカナダの人口は約3,500万人で、米国の3億1600万人の11%、日本1億2700万人の28%に相当する人口規模である。2012年の平均寿命は、米国が79歳（男性76歳、女性81歳）であるのに対し、カナダは82歳（男性80歳、女性84歳）と高い。カナダは世界的にも高齢化先進国に位置する国である³。

1——事業構成

（1）保険料収入の分野別構成比 年金、医療、生命保険の順で、米国に類似

次ページのグラフ1は、カナダと米国の生保業界の保険料収入の商品分野別構成比を見たグラフである。

カナダの生保業界の保険料収入構成比は、個人生命保険と団体生命保険をあわせた生命保険分野が18.7%、個人年金と団体年金をあわせた年金分野が40.5%、個人医療保険と団体医療保険をあわせた医療保険分野が26.0%となっている。年金分野のウエイトが一番大きく、次いで医療保険分野、生命保険分野の順になっている。生保会社が保障を行わず管理だけを請け負っている団体医療保険の構成比を医療保険分野に加えた場合には、医療保険分野の比率が41%に達し、最大構成比となる。

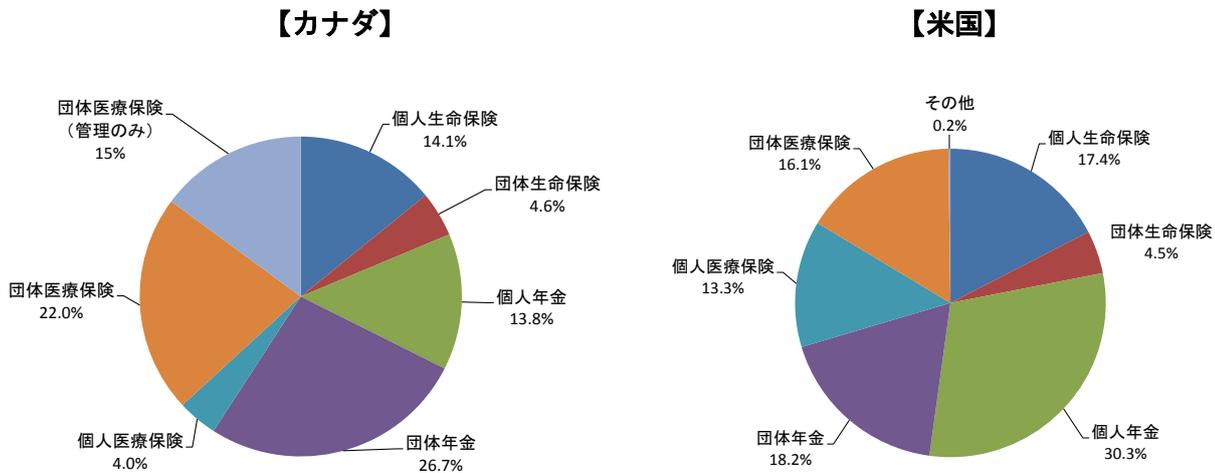
¹ スイス再保険 sigma N03/2014 に基づく。

² 英国と旧大英帝国時代の植民地であった国々で形成している緩やかな国家連合。カナダは英国と同じエリザベス二世をカナダ元首として戴いている。

³ WHO” World Health Statistics 2014” より。ちなみに日本の平均寿命は、84歳（男性80歳、女性87歳）である。

次に米国のグラフを見ると、生命保険分野（個人+団体）が21.9%、年金分野（個人+団体）が48.5%、医療保険分野（個人+団体）が29.4%となっており、やはり、年金、医療、生命保険の順となっている。カナダと米国の生保業界の、これら大分類の構成比は、かなり似通った形であることがわかる。

グラフ1 保険料収入の分野別構成比で見た事業構成比（2013年）



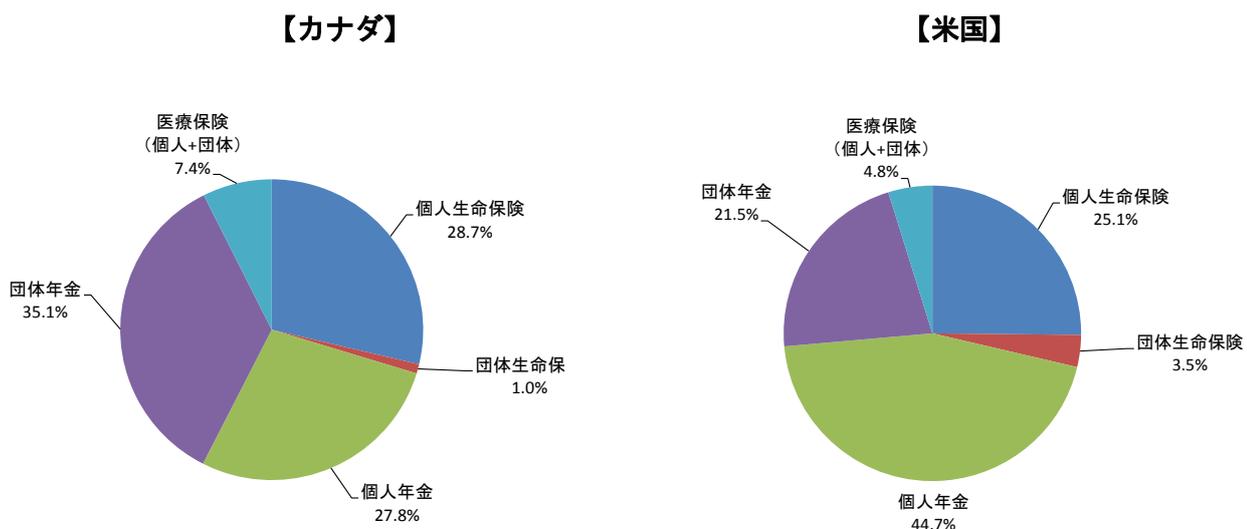
(資料) カナダ生命保険協会” Canadian Life and Health Insurance Facts 2014Edition” および米国生命保険協会” ACLI Life Insurers Fact Book 2014” より作成

(2) 責任準備金（負債）の分野別構成比 米国と同様に生保事業の年金化、貯蓄化が進展

生保会社にとっての預かり資産ともいふべき責任準備金（負債項目）の商品分野別構成比を見ると、生命保険分野（個人+団体）がカナダで29.7%、米国で28.6%、年金分野（個人+団体）がカナダで62.9%、アメリカで66.2%、医療保険分野（個人+団体）がカナダで7.4%、アメリカで4.8%となっており、こちらも両国が似た形になっている。

両国においては、年金分野の責任準備金の構成比が年を追う毎に上昇し、生保事業の年金化、貯蓄化が進展してきた。

グラフ2 責任準備金の分野別構成比で見た事業構成比（2013年末）



(資料) カナダ生命保険協会” Canadian Life and Health Insurance Facts 2014Edition” および米国生命保険協会” ACLI Life Insurers Fact Book 2014” より作成

2——各分野を米国と比較すると

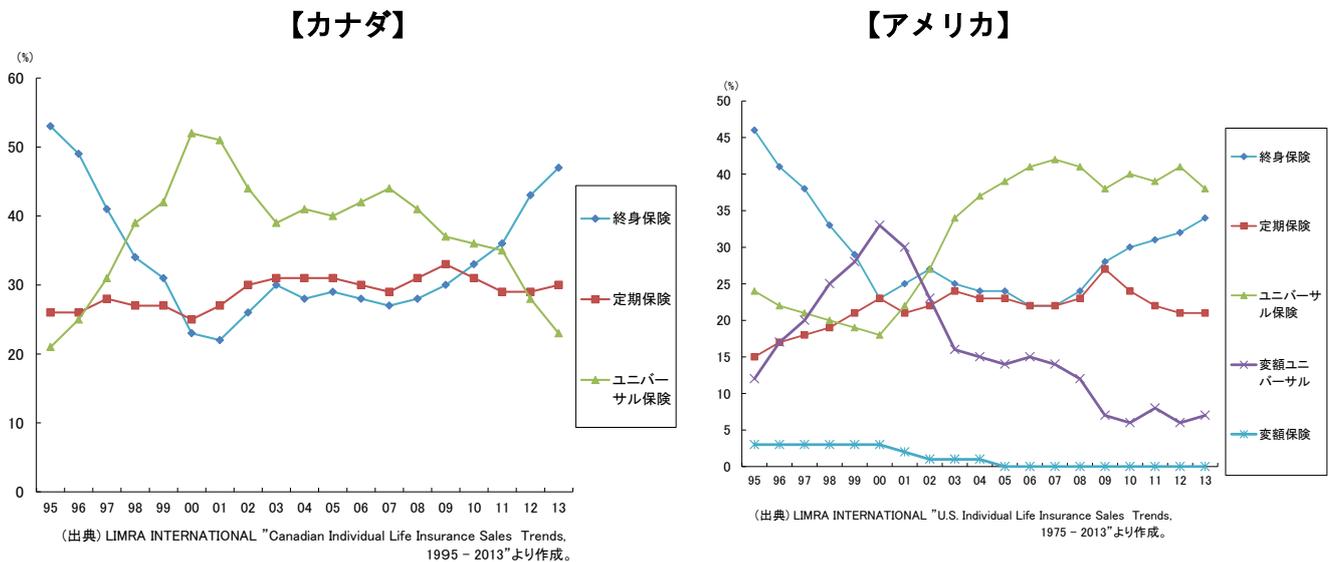
次に、それぞれの事業分野の中身を今少し詳しく見てみる。

(1) 個人生命保険分野では両国とも終身保険が復権

米国の生命保険マーケティングに関する調査・教育機関であるリムラは、米国だけでなくカナダの生保市場をも調査対象としている。リムラの資料によれば、カナダにおける個人生命保険商品の主力商品は、米国と同様、終身保険、定期保険、ユニバーサル保険の3種類である。米国と違って、変額商品はカナダにおいては目立たない。

90年代後半にユニバーサル保険が大きく伸び、主力の座を占めたが、近年の低金利環境の中では、貯蓄構造が安定的な終身保険が伸びている。このあたりは、米国の状況とよく似ている。

グラフ3 個人生命保険新契約の商品種類別構成比の長期トレンド（新契約年換算保険料による）



(2) 年金分野では、カナダはまだ団体年金が優位

年金分野では、カナダでは団体年金の保険料収入構成比の方が個人年金の構成比よりも大きいのに対し、米国では個人年金が発達して、団体年金を凌駕する規模になっていることが特徴的である。

カナダの個人年金商品には、分離勘定で運用する時価評価個人年金（＝変額年金）、一般勘定で運用する定額個人年金、前二者の複合型個人年金（コンビネーション年金）の3種類がある。2013年の販売実績の商品別構成を見ると、変額年金が61%、コンビネーション年金が20%、定額年金が19%という構造になっており、変額商品の人気が高い。この傾向も米国の個人年金におけると同様である。

(3) 医療保険分野では、両国に大きな相違

医療保険分野はカナダと米国の生保会社の取り組み方に大きな相違がある分野である。これは両国の公的な医療保険制度のあり方に由来する。

米国には高齢層を対象とする公的医療保険制度と低所得者層を対象とする公的医療保険制度があるのみで、広く一般の国民を対象とする公的な医療保険制度は存在しない。そのため、米国の人々が医

療保障を得るためには、民間生保険会社が提供する民間医療保険に加入するしかない。人々への全般的な医療保障提供の役割を背負った生保会社は、他国の公的医療保険に匹敵するような医療保険制度の構築を求められることになった。しかし、それは並大抵のことではない。そこで結果的には、米国の一般的な医療保険マーケットは、当該分野に特化したいくつかの生保会社が、医師のネットワークまでを包含したヘルスケアの枠組みを形成し、寡占的に事業展開するマーケットとなった。競争から離脱した他の生保会社は、そうした本格的な医療保険には手を出さず、ノンメディカルと言われる眼科診療保険、歯科診療保険、限定的に存在する特定層向け公的医療保険が保障対象としていない支出を保障する補足的保険等に携わるようになっていく。

一方、カナダには公的医療保険制度が州毎に存在し、全ての国民が公的医療保険による保障を受けている。カナダの公的医療保険制度においては、患者は医療機関から医療費を請求されることはない。このように公的医療保険制度は充実しているが、公的医療保険は外来処方箋薬や歯科診療を保障の対象からはずしている。そのため外来処方箋薬や歯科診療費の保障に対する国民のニーズは高い。そこで民間保険会社は、公的医療保険の保障から漏れた分野を保障する医療保険を補足的医療保険として販売するようになった。具体的な販売商品は、就業不能保険、歯科診療保険、処方箋薬代等を保障する公的医療保険補足保険、長期介護保険等である。

米国のように公的医療保険の役割を代替しているわけでもないのに、保険料構成比（グラフ1）における医療保険の構成比が米国と同じ程度となっているあたりは、カナダの生保業界の医療保険普及にかける努力が見て取れる。なおカナダでは、民間医療保険は、生保会社、損保会社ともに扱うことができる。この点、わが国における医療保険提供体制によく似ている。

さいごに

以上、カナダの生保会社の事業構造を米国と比較する形で見てきた。医療保険における両国の差は、公的な保障を代替、補完、強化するという民間生保会社の役割を考えさせるものとして興味深い。

次回の欧米生保市場定点観測では、プレーヤーである生保会社のあり方を通してカナダと米国の生保市場を比較する予定である。